

附属学校の新しい役割

教育デザインセンター
高 木 展 郎

1 附属学校との関係性の見直しの拠点

教員養成大学に附属する諸学校については、国立大学の法人化以降、その存在や在り方について、いろいろな課題が問われてきている。それは、教員養成大学の附属学校が、これまで、どのような役割を果たしてきたか、という問い直しでもある。

これまでの附属学校の多くは、教員養成に関わって、教育実習を行うことをその役割の主として機能してきた。この教育実習のみをその機能とすることは、明治以降の師範学校からの教員養成の機能を受け継ぐものであるが、これまで伝統的に行われてきた教育実習の内容と方法とが、時代に適応しないものになりつつある今日の状況の中で、その方向性が問われているということにもなる。

教育実習は、これまで大学で教師として自立するための理論的内容や具体的な方法等を学習したことを元に実際の学校に出向き、子どもたちと向き合う中で、教員としての資質を養成するために行われる。いわば、理論と実践との融合を図るためにあるとも言えるが、そこに課題があることが見えてきている。

その課題とは、一言で言えば、理論と実践との乖離であるが、その内容は複雑であり、その要因を簡単に指摘することはできないところに、今日的な教育実習の課題がある。

そこで、これまでの教育実習を見直す、ということを基軸に、大学と附属学校との連携の在り方を問い直すことが求められている。

2 附属学校との関係性の再構築

これまで附属学校と大学との関係は、教育実習がその大きな基盤となって構築されてきた。教育実習については、今後も、その役割としては大きなものがあるが、それだけではない、附属学校と大学、特に教員養成に関わる大学との関係が再構築されなくてはならない時代を迎えている。

この再構築には、いわゆる大学教員（大学のカリキュラム編成）と附属学校教員の、それぞれの関係性へのパラダイムシフトが求められる。

教育実習を典型とする大学と附属学校との関係は、これまで、学生を附属に送りお世話になる側と、学生を実習生として受け入れお世話する側というような関係の中に存在した。それは、教育実習を行うという目的のために、それぞれの主体の役割が分けられていたためでもある。

しかし時代は、そのような役割分担として、教員養成が機能する時代ではなくなりつつある。

教育ということをハブとして、そこで行われる様々な教育的な営為を、理論と実践との融合を図りつつ、その質の向上をいかに図るか、ということが教育の実践的研究として求められ、教員養成大学は、その時代の要請に応じて行かなくてはならない状況となっている。

教員養成大学の附属学校は、その研究を行う場であり、さらに、その研究を通しながら、次代の教員養成を行うことに、その役割がある。

このように附属学校を位置づけると、これまでの附属学校における教育実習を主とした大学との関係性を再構築する必要性がある。

3 これからの時代の教員養成

免許更新講習が行われるようになり、教師として教壇に立てば、あとは生涯教師として教職に就ける時代は終わった。教師になってから教師は学ぶということを行わなかったか、というとそうではない。官制研修だけではなく、自ら研修を行い自己を向上させている教師は多数いる。

教師になることは、教員免許を取得する、という一つの固定概念が崩れたことには、意味がある。しかし、一方で研修という名の元、子どもと向き合う時間が少なくなってしまうことには問題がある。

教育は、その大本に、子どもの未来を創る営みと、人間として陶冶することを目的としていることはいうまでもない。したがって、そこに関わることに焦点化された研究と実践とが行われなくてはならないのは、いうまでもない。

教員免許を取得して「教師になる」だけではなく、教師になってから「教師になり続ける」ことに意味がある。

これまでの附属学校と大学の教員養成には、このところが弱かった面がある。

したがって、これからの教員養成は、「教師になり続ける」ために、何を、どのように行うのか、ということが問われてくる。ここに、教員養成の今日的な課題と、これからの教員養成の在り方が示されていると言える。

4 教員養成における大学の意味

教師は、高度な専門職である。このことは、意外に意識化されていない。それは、教育を誰もが受け、誰もが学校教育を受けてきているからでもある。全ての国民が教育を受けたという原体験を有することが、一方で教育を身近に感じると共に、自分の体験や経験の枠組みの中でしか教育を捉えられていないという状況も生み出している。さらに、そこでの教師像は、自分がそれまでに関わった、教えてもらったことのある教師像の枠を出ることは少ない。いわば、誰もが身近な存在として教師を見ているからでもある。

しかし、身近な存在としての教師は、その背景に専門職としての高度な知識と技量とを併せ持つことも求められる。大学の教員養成に求められるのは、この高度な専門的知識の習得と技量とを理論的な背景の中で習得した教育実践を的確に行うことのできる教員を育成することにある。

これまでは、大学では理論のみを獲得し、その実践は教育実習に行ったときにそこで学べばよい、というような考え方もあった。

しかし、複雑化した現代社会の中で、さらにグローバル化する社会の中で、未来に生きる子どもたちを育成する教育において、これまでの教員養成では不十分な面が多々あることが分かってきている。

横浜国大教育人間科学部の教員養成に向けた改革の拠点は、ここにあると言える。

それは、大学のカリキュラム改革と共に、教員養成立

リキュラムを時代に合わせていくことによって可能となる。

これまで附属学校との役割が分かれていた教員養成を、大学の教員養成と融合する中で、その再構築を図って行かなくてはならない。

今回のフォーラムで附属鎌倉小学校と附属横浜小学校が提案した附属学校のこれからの在り方は、その一つの提案であった。

5 附属学校の新しい役割

教員養成における大学と附属学校との役割は、再構築しなくてはならない時代を迎えていることは先に述べた。そこでは、その役割の意味を考えなくてはならないが、役割とすると、それぞれが乖離し、分担したものと考えられる。そこで、これからの大学と附属学校では、その関係を役割と分けることなく相補的な関係性の中で、それぞれが特色を生かし共同して教員養成を行うことに意味がある。

この共同性は、今更、という観もあるが、教師のリカレント教育や地域における教育拠点・連携拠点としての大学と附属学校、さらに、大学の教育カリキュラムとしての教育実地研究や大学院教育学研究科の教育インターンにおいて、実現して行かなくてはならない課題でもある。

地域の公立学校ではできない様々な実験、実証的な教育研究を先導的に行うことで、地域に新しい学校教育を発信することは、大学と附属学校の役割でもある。

さらに、既に行われているが、公開授業や研究会によって、教育の新しい内容を地域に敷衍する役割も行われている。それは、ある意味において教師のリカレント教育でもあり、教師教育の役割も担っている。

附属学校の新しい役割、ということを考えるが、既に多くのことは行われており、それをどの様に意識化し、実践の場に機能されることができかが、今日的な課題でもある。

教育という営みは、その成果が短いスパンの中で出るものではない。地道な毎日の教育活動を通し、一人一人の子どもたちが学校で学ぶことに喜びを見いだしていくことを支える教員養成システムを機能させることが、附属学校の新しい役割として問われている。